

氏名（本籍地）	烏力吉吉日嘎拉（中国）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第374号（甲文第43号）		
学位記授与の日付	平成27年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	『金光明経』の思想的研究 －「空性品」,「金勝陀羅尼品」,「最浄地陀羅尼品」を中心－		
論文審査委員	主査 教授	博士（文学）	渡辺章悟
	副査 教授		伊吹敦
	副査 教授	博士（文学）	山口しのぶ

【論文審査】

本論文は「『金光明経』の思想的研究」というテーマで、その中の「空性品」,「金勝陀羅尼品」,「最浄地陀羅尼品」という三つの章を中心として、空性から陀羅尼、いわば大乘から密教への思想展開を追求した論文である。

『金光明経』（*Suvarṇaprabhāsa-sūtra*）は四世紀頃に北インドで成立したとみられる中期大乘経典であり、サンスクリット原典の他、複数の漢訳とチベット語訳、ウイグル語訳、モンゴル語訳などの翻訳資料が現存し、インドから東アジアを中心として広く流布した経典である。

本経は空、懺悔の思想を中心とし、四天王、吉祥天、地居天などの仏法守護や、国家鎮護の信仰を配した幅広い、物語性に富む経典であり、わが国では国分寺の拠り所となった護国の経典として知られている。一方、インドでは仏身論で知られ、ネパールでは「九大法宝」中の一経典であり、モンゴルでは毘沙門信仰の根拠となったように、各地での評価は異なる。

1) 本論文の概要

ウルジーガル氏の論文は、この『金光明経』のうち、「空性品」,「金勝陀羅尼品」,「最浄地陀羅尼品」という三つの章をとり上げ、その中に流れる思想的連関を検証したもので、この分野では未だ取り上げられることのなかった研究である。

本論文の構造は、最初に「略号及び参考文献」があげられ、ついで序論、本論、付論の三部構成からなる。以下、最初にその内容を概説しておく。

まず、冒頭の参考文献とビブリオグラフィーに続き、詳細な研究史と従来の研究の問題点等を論じた「序論」が述べられる。おそらくこの箇所の記述は、現在知られる限りの『金光明経』に関する世界の研究史が纏められているとあって良い。

次いで、「本論」では『金光明経』の先の三つの章を取り上げ、これらに説かれる思想研究とこれら三つの章が『金光明経』の成立にどのように関わってくるのかという、構成と位置づけの分析が行われ、最後の「結論」は、以上の分析を簡単に纏めたものである。

本論文では、この後に二つの付録がつけられているが、これは本論文の資料編であり、三十三偈頌からなる「空性品」のサンスクリット本と、「金勝陀羅尼品」のチベット語訳からの翻訳研究が収められている。

まず、冒頭の参考文献では、近代の原語に翻訳研究された文献が一次資料、二次資料に区分され、丁寧に纏められているので、研究者にとって非常に便利な文献表になっている。

次の「序論」で言及される文献の言語を見ても、サンスクリット原典から、漢訳、チベット語訳、モンゴル語訳、コータン語訳、ウイグル語訳が扱われ、それぞれの写本から刊本までを特定し、その所在から系統論までを論じている。特に重要なのは『金光明経』のサンスクリット原典ではJ.Nobel及び泉芳環による二種の刊本、三種の漢訳、三種のチベット語訳、二種のモンゴル語訳といった、計十点の資料を分析し、それらすべての章名を対照させたリストを作成している。

そもそも本経は、それぞれの資料によって、章の区分も構成も大きく異なっている。その内容の相違も無視できないほど大きい。従ってこれらの対応をきちんと示すことにより、本経の成立と発達、つまり経典の系統が明瞭に分かるのである。ウルジーザルガル氏の研究は、このような本経全体の総合的な研究に基づいてなされている堅実な研究と言える。このような資料を分析した研究はこれまで見られなかったものであり、この点で大きな貢献を果たしていると言えよう。

この資料の対校の後に、最も発達した義浄による漢訳を中心に、すべての章の概要を纏めているのも本経を読み解くための簡便な概説となっている。

2) 本論文の目的と研究方法

本論文には最初に「問題の所在」がなく、明確でない点があるが、各章（三つの章）の目的は「研究の方法」(pp.30-31)の中で説かれている。それによれば、第一章は漢訳の伝統を離れ、梵本の忠実な検証により新たな空性理解を試みる。第二章はチベット語訳の和訳と、金光明経に挿入された理由。第三章は菩薩の十地思想の思想背景を検討する、となっている。しかし、なぜ三つの章のみを取り上げたのかの説明はない。それは後述するように本論文を通読して初めて了解されるもので、少々説明不足の感がある。

3) 第一章「空性品の研究」の検討

第一章の「空性品の研究」では、従来から本章が中国法相宗の慧沼の注釈によって解釈される伝統があった。そこで、筆者は一端、慧沼注を再検討し、以下のような結論を導いている。

慧沼注の空性解釈では「八種の空性説」を導入しているが、その解釈はアビダルマに説かれる空詳説を当て嵌めたものにすぎず、必ずしもサンスクリット原典に即した解釈ではない。実際は、阿含経類に説かれている「無常・苦・無我」に基づいて一切法の空性を説くこと、初期大乘の否定的論理に見られる空性説や、『中辺分別論』などの唯識思想で説かれる空性説を採用しながら構成されていることを指摘し、本章の思想的背景を推定している。論者のこの推定は検証が十分でない点もあるが、基本的には妥当な結論であり、本経「空性品」の成立の背景を明らかにしているという意味では正しく評価できる。

また、本章の偈頌が正規のサンスクリットではなく、Buddhist Hybrid Sanskrit によって書かれているが、被審査者はそれらすべてを翻訳し、新たな訳と解説を提示しつつ、本章の構成を「空性を説く理由（序）、一切法空の具体例（本論）、空性が対象とする最終目的としての涅槃・涅槃に至るための智慧（結論）」という三部で構成されていると分析している。この論述も客観的な分析として評価できる。

4) 第二章「金勝陀羅尼品」の検討

本章はサンスクリット原典にはなく、漢訳とチベット語訳にのみ現存する。そこで被審査者は二種類の漢訳と二種類のチベット語訳、これにモンゴル語訳を加えて内容を比較しながら、チベット語訳に基づいて解説を進めている。

それによれば、本章の構造は「金勝陀羅尼を修得する手順」「真言陀羅尼の読誦」の実際から、「金勝陀羅尼がもたらす功德」「金勝陀羅尼を修得するための実践方法」などであり、誠に興味深い陀羅尼の実践が明らかにされている。このようなマントラを説く文章の翻訳は極めて困難な作業であるが、氏の翻訳は概ね妥当であり、これは高く評価できる。また、本書の翻訳に当たって、丹念に陀羅尼品の引用を調査してその背景を分析し、脚注に明記している点は、文献学的手法を踏まえて説得力のあるものである。この調査によって、本経が中期大乘經典として成立しながらも、次第に密教の影響を受けながら増広し、変容してゆく状況を根拠づけるもので、本論文の大きな成果でもある。ただし、その幾つかが引用文のまま翻訳がなされていないことは残念であり、今後の課題といえる。

本章における陀羅尼の思想的分析の中での大きな特徴は、「金勝陀羅尼」の解釈として、「聞持陀羅尼」を重視する点である。この場合の「聞持陀羅尼」とは学習したものを記憶し、保持する能力である。本論文で重要なのは、この聞持陀羅尼が、過去・現在・未来という三世に存在する諸仏の母、すなわちブッダを生みだす悟りの智慧としての般若波羅蜜と同

一視されていることを指摘しつつ、それが空性説と深い思想的関連を持っていると断言している点である。この点は他の經典の解釈で指摘されていることでもあるが、すでに『金光明經』の中に見られることを明言しているのは氏が初めてであろう。

さらに、被審査者によれば、「主要な思想である空性説を説く前に、空性を認知する智慧である般若波羅蜜に着目し、この般若波羅蜜を得るためには聞持陀羅尼を習得すべきであると考えられたため、聞持陀羅尼と空性が連続して説かれている」と考える。この見解によって、後代になって「空性品」の前に「金勝陀羅尼品」が添加されたのであると推測しているが、このような指摘は、本經の構成を重層的に考察するという意味でも非常に重要な指摘である。

また、陀羅尼についての分析は、微に入り細を穿ち、これまでの多くの先行研究を踏まえており遺漏はない。加えて、本經の陀羅尼の評価を空性との関係で論ずる点、陀羅尼の功德、その修得方法などについて、聞持陀羅尼から口密の真言に至る過程を示すという評価を行っている点などは、論拠不足の点はあるものの、審査対象者の独自の見解として評価できる。

5) 「最浄地陀羅尼品」の検討

次いで、第三章「最浄地陀羅尼品の研究」である。本章では、大乘の実践思想である<菩薩の十地>思想に焦点を当て、六波羅蜜から十波羅蜜へ、十波羅蜜と十地、十地と十種三昧、陀羅尼修得の階梯と十地の階梯など、非常に重要な問題があきらかにされており、この何年かに被審査者が研究してきた一つの成果がここに示されている。

なお、本章はサンスクリット原典が存在しない。そこで被審査者は、真諦訳と義浄訳の二種の漢訳とチベット語訳を比較してその異同を検討する。さらに、『仏説莊嚴菩提心經』、『大方広菩薩十地經』、『大宝積經』「無尽意菩薩會」に辿り、これらの教説の内容との類似点を指摘し、一貫して悟り求める菩薩の菩提心という概念が見られ、この菩提心を起こすために菩薩の十地が説かれていることを指摘する。

ただし、本章の結論部分で、「真言陀羅尼は十地の各菩薩を守護するもの」と言う一方、「初地の菩薩を守護するため」とするのは若干の論理の飛躍が見られる。しかし、本經に説かれる十地思想の成立を『仏説莊嚴菩提心經』等に辿り、これらの十地説に編集を加えながら『金光明經』に取り入れられと言う指摘は、非常に示唆的で大胆なものである。いまだ仮説の状況ではあるが、他の十地經関係には見られない真言陀羅尼と十地との結びつきなどを見ると、今後の有力な学説となるであろうと想像させる。

【審査結果】

以上のように本論文は未だ解明されていない『金光明經』の三つの章を取り上げ、その

サンスクリット原典、チベット語訳、漢訳を丹念に読み解き、本経の成立の階梯を思想的に解明した論文であり、極めて学術的で、創造性の豊かな研究であると評価できる。

ただし、審査対象者が外国籍であることから日本語表現という点で表現の難渋な箇所もあるが、近代語の研究文献を含め、複数の言語を駆使して緻密な研究を継続した努力と、本経典の成立過程を解明した開拓的な成果は、文学研究科（仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても、充分妥当な研究であると認められる。

このことから本審査委員会は全員一致をもって、ウルジージャルガル氏の博士学位請求論文を、学位を授与するに相応しいものと判断する。